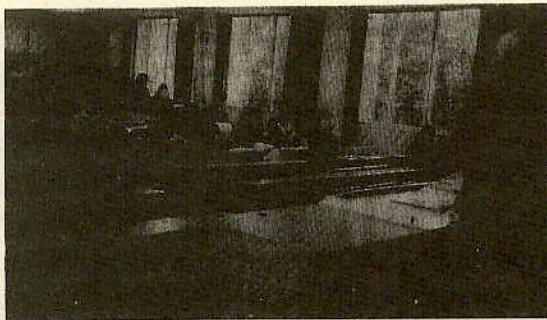


事業団中西理事長

千葉大学の教壇に

今年四月、センター事業団には二十一人の大学新卒者が入ってきます。今、学生の中でも「労働者協同組合」の名は知られ始めており、千葉大学教養部の授業には事業団全国連合会の中西理事長が講師としてよばれました。事業団に来る富満陽子さん（茨城キリスト教大学4年）も一緒に授業を受けました。



「大学で講義をするというのは初めてですか」と中西理事長



新年号第2部

私も授業を受けました

茨城キリスト教大学 富満陽子さん

あきらめきつちやつてるが12月16日の清々しく晴れた冬の朝。「いやあ、教室をそうじしたら、時間がかつちやつて」待ち合せの時間にちよつと遅れ、西千葉駅に佐藤和夫先生がジパン姿であられた。一年次生を対象に「新しい文化の創造をテーマとして、各分野の先端をゆく人を招く特別講座」とのこと。「今の学生は、今の企業にあきらめきつちやつてるんです。だから、労働者協同組合みたいな働き方が本当に可能だったら、みんな希望をもてるんです」歩きながら中西理事長に早口で語りかける佐藤先生。今日の講義を心待ちにしておられたようだ。

「雇う・雇われる関係でなく、教室は、やや空席も



「父を労まわると富満さん

主人公になる働き方って本当にできるんですか…

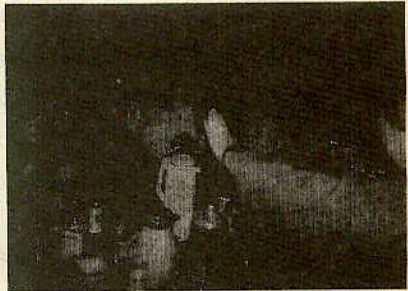
本をつくって、自分たちで民主的に話しあつて管理・運営する。できるだけ剰余も多く出せるようにして、働き手に応じて分配し、新しい事業展開のための資金も蓄積する。「雇う・雇われる関係の中では、係の中ではない、係の外に属する」といふ方向に進まざるをえない」と、熱弁した。

ポランティアで見たことと、私は、私は大學生活の大半をポランティアアサールの活動に忙しかつた。「授業も最大限とつたが、地域の社会福祉関係者のとりくみや施設での行事などにはほとんど参加した。しかし、そこで見たのは、人間としての尊厳の追求を理念としてかかっている。一方では、経営面から理念

を否定するすがたであり、他方では、あきらめ、摩滅して二三年の渦の中、女子学生と私は多少興奮して話していたのだろうか。講義には出席しなかつたが、という学生も話に加わり、労働者協同組合についてよく知りたいたと、余つた資料を数部持つていった。

生協でパンを買い、佐藤先生の研究室にもどると、一九八九年にユーゴスラビアで生活した経験から、「たしかに、協同と友情が当たり前である社会がある」と、目を輝かせて話しておられた。私は、協同組合の行く先が、明るく照らし出されているように感じ、励まされた。

この利潤原理社会に對して考え、実践している協同の原理の視点について訴え、一時間半の授業を終えた。あとで女子学生に聞く、講義のなかみは十分のみにこめた、これを機会に労働者協同組合に興味をわいてきた、という、なかなか良い手応えであった。以前から問題意識はあったが、実際に、この日本社会の中で、このような理念で事業を展開しているところがある、という新鮮な驚きは、私自身が事業団に対して初めて味わつた。



学卒内定者の役員面接のあとと交流会。夜1時、2時と続く「中年パワー、にやや圧倒されたか？」